

中国語における数を含む「時間詞」 について

— 表現方法を中心として

小 川 郁 夫

1. はじめに
2. 「年」「月」「日」の言い方について
3. 「曜日」「週」の言い方について
4. 時間の言い方について
 4. 1. 「何時〔間〕」「何分〔間〕」
 4. 2. 「何時何分」
 4. 2. 1. “钟”の付加について
 4. 2. 2. “零”と“过”の付加について
 4. 2. 3. “分”の省略について
 4. 3. 「何時15分」「15分間」
 4. 4. 「何時何分前」
5. おわりに

1. はじめに

刘月华・潘文娉・故铎1983では「時間詞」として“今天”“现在”“星期六”“四点”“三个月”“八小时”“十年”“两分钟”などを挙げ、これらを次のような2種類に分類している⁽¹⁾。

- (i) 時間のある1点「時点」を表すもの
- (ii) 時間の長さや量「時量」を表すもの⁽²⁾

上例では“今天”“现在”“星期六”“四点”が (i) にあたり，“三个月”“八小时”“十年”“两分钟”が (ii) にあたる。

朱徳熙1982では (i) だけを「時間詞」として扱い，(ii) を「数量詞」であるとして「時間詞」から排除している⁽⁶⁾。(ii) を「時間詞」「数量詞」のいずれとして扱うべきかという問題については本稿では検討しないが，意味的には (ii) も時間を表していることは間違いなく，特に数を含むものに関しては (i) と (ii) の間に表現の上でも密接な関係がある。

本稿ではとりあえず (i) (ii) をともに「時間詞」とし，このうち数を含むものについて「時点」と「時量」の表現方法を見ていく。最も問題が多いのは「何時何分」などの時間を表す「時間詞」であるが，まず始めに「年」「月」「日」「曜日」などの言い方について概観することにする。

2. 「年」「月」「日」の言い方について

中国語の“年”という語は名詞と量詞を兼ねている。

〔1〕 一九八二年

の“年”は名詞であるが，

〔2〕 一年，两年，三年……

は「1年間」「2年間」「3年間」……の意味なので，この“年”は量詞である⁽⁶⁾。

“月”は名詞である。何故なら「1月」「2月」「3月」……は，

〔3〕 一月，二月，三月……

と言うが，「1ヶ月」「2ヶ月」「3ヶ月」……は，

〔4〕 一个月，两个月，三个月……

のように量詞“个”を用いなければならないからである。

「1日」「2日」「3日」……という日付を表す場合には，名詞“号”または“日”を用いて，

〔5〕 一号，二号，三号……

〔5〕 一日, 二日, 三日……

と言うが, 「1日間」「2日間」「3日間」……は“天”を用いて,

〔6〕 一天, 两天, 三天……

と言う。この場合, 量詞を用いなくてよいことから“天”は量詞としての機能を持つことがわかる。

これら「年」「月」「日」の言い方で, それぞれの前者〔1〕〔3〕〔5〕〔5〕は「時点」を表し, 後者〔2〕〔4〕〔6〕は「時量」を表しているが, 注目すべき現象として次の2点が挙げられる。

(i) “一”は, 「時点」を表す場合には本来の声調第1声で読まれるが, 「時量」を表す場合には後続音節の声調の違いに応じて第2声または第4声で読まれる⁶⁾。

(ii) 「時点」を表す場合には“二”が使われ, 「時量」を表す場合には“两”が使われる⁶⁾。

3. 「曜日」「週」の言い方について

中国語では「曜日」を表す場合にも数字が用いられる。「週」という意味を表す語“星期”の後に“一”“二”……“六”を加えたものが「月曜日」「火曜日」……「土曜日」に相当する。

〔7〕 星期一, 星期二……星期六

「日曜日」は数字のかわりに“日”または“天”を用いる。

〔8〕 星期日

〔8〕' 星期天

“星期日(天)”は例外だが“星期一”から“星期六”までに使われている数字は順序を表している。

「1週間」「2週間」「3週間」……は“星期”または“周”を用いて,

〔9〕 一个星期, 两个星期, 三个星期……

〔10〕 一周, 两周, 三周……

のように言う。このことから“星期”は名詞だが、“周”は量詞としての機能を持つことがわかる。“星期”と同じ用法を持つ語に“礼拜”があるが、現在では“星期”の方がよく使われる。

〔7〕〔8〕〔8〕’は「時点」を、〔9〕〔10〕は「時量」を表している。

4. 時間の言い方について

中国語の「何時〔間〕」「何分〔間〕」「何時何分」など時間の言い方は様々な問題を含んでいる。そこで本稿では中国語のネイティブスピーカー8人をインフォーマントとする調査を行なった⁹⁾。以下ではこの調査結果を検討しながら考察を進めていく。

4. 1. 「何時〔間〕」「何分〔間〕」

中国語で「1時」「2時」「3時」……という時刻を表す場合には次のように言う。

〔11〕 一点, 两点, 三点……

これらは一般に「1時間」「2時間」「3時間」……という時間の量「時量」を表すのではなく、時間の区切り「時点」を表すと考えられている。これらの後にもともと「鐘」(かね)という意味の語“钟”を加えても意味は変わらない。

〔11〕’ 一点钟, 两点钟, 三点钟……

このほか、文章語では、

〔12〕 一时, 二时, 三时……

という言い方もある。

中国語の“二”と“两”は基本的には、“二”は「2番め」という順序を表し、“两”は「ふたつ」という量を表すというように使い分けられている¹⁰⁾。「2時」は「2番めの時間」だから〔12〕の“二时”は問題がないが、〔11〕

〔11〕'では何故“*二点〔钟〕”と言わず“两点〔钟〕”と言うのであろうか。(※は不成立であることを示す)

このことについて、上野恵司1988では“两点〔钟〕”は「『二つの鐘が打たれる時刻』というのが本来の意味であった」としている⁹⁾。“点”はおそらく鐘を打つ場合の動作量を表す量詞であったのだろう¹⁰⁾。“两点〔钟〕”は鐘を打つ動作量が「ふたつ」であるから“两”が使われているだけであって、“两点〔钟〕”自体の表す意味は「2時」という時刻すなわち「時点」である。

中国語の“一”は本来第1声であるが、後続音節の声調の違いに応じて次のような変調現象を起こす。

(i) 後続音節が第1声、第2声、第3声の場合は、第1声から第4声に変調する。

(ii) 後続音節が第4声の場合は、第1声から第2声に変調する。

ただし例外があり、“一”が「1番め」という順序を表す場合には変調せずに第1声のまま読まれる¹¹⁾。〔12〕“一时”の“一”は第1声である。

“一点〔钟〕”の“一”はどの声調で読まれるのであろうか。考えられるのは次の2通りである。

(ア) “一点〔钟〕”は本来「1つの鐘が打たれる時刻」という意味であるから、後続する“点”の声調第3声に応じて第4声で読まれる。

(イ) “一点〔钟〕”は「1番めの時間」という「時点」を表しているので、本来の声調第1声で読まれる。

このことを現在日本で発行されている中国語テキストで調べてみると、(ア)(イ)の両方が存在している¹²⁾。筆者が8人のインフォーマントに調査したところでは、1人が(ア)、7人が(イ)の読み方をした。このことから即座に(イ)が正しいという結論を引き出すことはできない。「2時」を表す“两点〔钟〕”で“两”が使われているのだから、語の由来としては(ア)が正しいからである。しかし、語本来の意味はともかく、7人のインフォーマントが“一点〔钟〕”を順序としてとらえたことだけは確か

である。この7人のインフォーマントの意識の中では、“一点〔钟〕”“两点〔钟〕”“三点〔钟〕”……は時間の順序を表しており、「2時」で“两”を使うのは特例ということになろう。

「1分」「2分」「3分」……という時刻「時点」を表す場合には、

〔13〕 一分, 二分, 三分…… (“一”は第1声)

〔14〕 一分, 两分, 三分…… (“一”は第4声)

のどちらを使うのであろうか。まず“一”の声調を調べるために、「3時1分」を表す、

〔15〕 三点一分

を8人のインフォーマントに発音してもらった⁴⁹。その結果、7人が第1声、1人が第4声で読んだ。

また、「3時2分」を表す場合は、

〔16〕 三点二分

〔17〕 三点两分

のどちらを使うかを調査したところ、〔16〕については8人全員が成立するとしたが、〔17〕については、5人が成立、2人が不自然、1人が不成立とした。「1分」「2分」「3分」……という「時点」を表す場合には〔13〕の方が自然なようである。

先に見たように「何時」と言う場合には“点”の後に“钟”を加えてもよかったが、「何分」の場合、“分”の後に“钟”を加えるとそれは「時点」を表さなくなり、「何分間」という「時量」を表すようになる。

ここでまた「2分間」の場合は“二分钟”か“两分钟”かという問題が発生する。そこで、「まだ2分間ある」という意味を表す場合には、

〔18〕 还有二分钟。

〔19〕 还有两分钟。

のどちらを使うかを調査したところ、8人のインフォーマント全員がどちらも成立すると答えた。「2分間」は「時量」であるから“两分钟”の方が文法に合っているように思われるが、「時点」を表す場合の“二分”という

言い方の影響もあるのであろう。また、「1分間」を表す“一分钟”の“一”は8人全員が第4声で読んだ。これは明らかに量としてとらえられている。従って「1分間」「2分間」「3分間」……という「時量」は次のように言うと考えられる。

〔20〕 一分钟，两（二）分钟，三分钟……（“一”は第4声）

“分”の後に“钟”を加えると「時量」を表すが，“点”の後に“钟”を加えた，

〔11〕' 一点钟，两点钟，三点钟……

は「時点」を表すだけで，「時量」を表し得ないのだろうか。

倉石武四郎1963の“点”の項に，

〔21〕 费了三点钟的工夫。（3時間をついやした）

という例文があり，「…時間というときは“…个钟头”であるが，ちょっとした時間なら“点”でもかまわない」というかなり曖昧な説明がなされている⁶⁴。この例文について，8人のインフォーマントのうち5人が不成立，残る3人が不自然だとした。〔11〕'にもともと「時量」を表す用法があったのかどうかについては今のところ論ずるだけの資料はないが，現在ではそのような言い方をしないと行ってよからう。（このことについては4.

2. 1で再び検討する）

「1時間」「2時間」「3時間」……という「時量」を表す場合は，現在の2通りの言い方を用いる。

〔22〕 一个钟头，两个钟头，三个钟头……

〔23〕 一个小时，两个小时，三个小时……

ここでは“钟头”“小时”ともに「60分間」に相当する「時間」という意味を表す名詞として使われているが，“小时”の方は量詞“个”を用いずに，

〔23〕' 一小时，两小时，三小时……

と言うこともできる。このことから“小时”は量詞としての機能を持っていることがわかる。

4. 2. 「何時何分」

「3時5分」「3時20分」などの時刻を表す場合には“…点”と“…分”を組み合わせて、

〔24〕 三点五分

〔25〕 三点二十分

などと言うが、中国語テキストの中にはこれらの後に“钟”を加えることができるとしているものもある⁹⁴。また、「3時5分」を表す場合は〔24〕よりも、

〔26〕 三点零五分

〔27〕 三点过五分

の方が頻繁に使われる言い方であり、「3時20分」の場合は〔25〕の“分”を省略した、

〔28〕 三点二十

という言い方も可能である。“两点〔钟〕”“三点〔钟〕”などの“钟”はオプションであるが、“三点五分”“三点二十分”などの後にも“钟”を加えることができるのかどうか。“零”“过”はどのような時刻を表す場合に用いるのか。また、“分”はいつでも省略可能なのかどうか。これらの問題について調べるために、ここでもいくつかの調査を行なった。調査は8人のインフォーマントに例文を提示し、成立（○）、不自然（?）、不成立（*）の判断を下してもらうという方法を取った。以下の表中の数字はその判断を下したインフォーマントの人数を示す。

4. 2. 1. “钟”の付加について

始めに“三点钟”“三点…分钟”“三点半钟”が成立するかどうかを調査した。結果は次頁の表の通りである。

		○	?	*
三 点 钟	(3 : 0 0)	8	0	0
三 点 五 分 钟	(3 : 0 5)	0	4	4
三 点 十 分 钟	(3 : 1 0)	1	4	3
三 点 二 十 分 钟	(3 : 2 0)	1	4	3
三 点 三 十 分 钟	(3 : 3 0)	2	3	3
三 点 半 钟	(3 : 3 0)	4	2	2

調査の結果からは、“三点五分”“三点十分”“三点二十分”“三点三十分”の後に“钟”を加えることができるとは言い難い。これは“分”と“钟”が結合してしまい“*三点/…分钟”という構造としてとらえられ「*3時何分間」のような、意味をなさないものになってしまうからであろう。そのほか“三点四十分”“三点五十分”などについては調査していないが、ほぼ同様の結果が得られると思われる。

“三点半钟”についてはインフォーマントの4人が成立、2人が不自然とし、成立しないとした者は2人であった。これは“*半钟”という言い方が存在しないため“*三点/半钟”のような誤った構造としてとらえられることがないためであろう。“三点半钟”は“三点半/钟”と分析される。上野恵司1988の言うように三点钟”というのは「3つの鐘が打たれる時刻」であるから，“三点半钟”は「3つと半分の鐘が打たれる時刻」ということになる。もちろん“三点半钟”は「3時半」という時刻すなわち「時点」であって、「3時間半」という「時量」ではない。「3時間半」を表す場合には“三个半钟头”と言う⁶⁶。ところでこの“三个半钟头”の構造は“三点半钟”の構造と一致している。“个”も“点”も量詞であり，“钟头”も“钟”も名詞である。“三个半钟头”は“三个钟头”(3時間)と“半个钟头”(半時間)が組み合わさってきたものと考えられることができる。

三个钟头+半个钟头→三个半钟头

これと同様に“三点半钟”も、

三点钟+半点钟→三点半钟

のように、“三点钟”（3つの鐘が打たれる時刻）と“半点钟”（半分の鐘が打たれる時刻）が組み合わさってできたものと考えることができよう。そして『中日大辞典』の“半”の項を見ると“半点钟”という語が収録されており、「＝“半个钟头”，30分（間），“三十分鐘”に同じ」と説明されている⁸⁹。『中日大辞典』の記述のように“半点钟”に“半个钟头”の意味があるとする、“一点钟”“两点钟”“三点钟”……が「1時間」「2時間」「3時間」……という「時量」を表し得るのかという4.1で若干触れた問題が再び浮かび上がる。そこで、

〔29〕 还有半点钟。（まだ半時間ある）

〔30〕 还有一点钟。（まだ1時間ある）

という例文を使って8人のインフォーマントに尋ねたところ、〔29〕については○が4人、?が1人、*が3人、〔30〕については○が1人、?が2人、*が5人という結果が得られた⁹⁰。“一点钟”に比べると、“半点钟”には「時量」を表す用法がないとは言いきれないようである。このことについて筆者は次のように推測している。

“…点钟”は本来は上野1988の言うように「鐘が打たれる時刻」すなわち「時点」であった。しかし「時点」と「時量」には極めて密接な関係がある⁹¹。例えば「3時」という「時点」は往々にして「12時から3時間」という『時量』が過ぎた時刻」としてとらえられたりする。そのため“…点钟”に「時量」を表す用法が生じ、かつてはその用法でも使われていたのだろう。“半点钟”についても同様であるが、もともと鐘を半分打つことなどできないのだから、こちらはもっぱら「時量」を表す語として使われていたのではないだろうか。

しかし、〔29〕を不成立もしくは不自然としたインフォーマントが4人いることからわかるように、“半点钟”は現在の中国語において必ずし

も容認可能というわけではない。

「3時半」を表す場合も，“三点半钟”より“三点半”の方が一般的であることは明らかである。調査結果中，“三点三十分”を成立するとしているインフォーマントが2人いるのは，“三点三十分”と“三点半”が同じ時刻を表す語であることが関係しているのかもしれない。

4. 2. 2. “零”と“过”の付加について

「3時5分」という時刻を表す場合には，“三点五分”よりも“零”または“过”を加えた“三点零五分”“三点过五分”の方がより頻繁に使われる。“零”について『現代汉语八百词』には，“有强调零头的意思”（端数であることを強調する意味を持つ）とある⁴⁴。また，“过”は「過ぎる」という意味の動詞であるから“三点过五分”は日本語の「3時5分過ぎ」に相当す

	○	?	*
三点零五分 (3:05)	8	0	0
三点过五分 (3:05)	8	0	0
三点零九分 (3:09)	8	0	0
三点过九分 (3:09)	8	0	0
三点零十分 (3:10)	6	2	0
三点过十分 (3:10)	6	2	0
三点零十五分 (3:15)	3	3	2
三点过十五分 (3:15)	6	0	2
三点零二十分 (3:20)	2	0	6
三点过二十分 (3:20)	4	1	3

のような言い方である。ここでは、この“零”と“过”が「何分」まで使用可能であるかを調査した。結果は前頁の表の通りである。

「3時5分」「3時9分」では“零”も“过”も使用することができる。“三点零五分”“三点零九分”と言った場合には「3時と5分」「3時と9分」のように“五分”“九分”が“三点”の端数としてとらえられているのであろう。

「3時10分」の場合、『現代汉语八百词』では“三点零十分”を可とする^脚。同書では“十分”も端数と見なしているということであろう。しかし、本稿の調査では2人のインフォーマントがこれを不自然だとした。“三点过十分”についても同様の結果が得られたが、「3時10分」を表す場合には“零”“过”を加えない“三点十分”の方がより自然なようである。

「3時15分」「3時20分」については“零”と“过”で異なる結果が得られた。“过”の使用を可能とするインフォーマントの数が多いが、これは“过”が「過ぎる」という意味の動詞であるためであろう。しかし“三点零十五分”“三点零二十分”を成立するとしたインフォーマントが複数存在することは注目すべきことで、これらのインフォーマントは“零”を、“…点”と“…分”の間の単なる「つなぎ」の語としてとらえているのであろう。

“三点过五分”の“过五分”は「5分間過ぎる」という意味で、この“五分”は理屈から言えば「時点」ではなく「時量」を表している。そこで、“五分”の後に“钟”を加えることができるかどうかを、

〔31〕 三点过五分钟

という例文を使って調査したところ、5人が成立、3人が不成立とした。〔31〕は絶対に成立するとは言いが、もし成立するとすれば“*三点过五分/钟”ではなく、“三点/过五分钟”と分析される。“钟”を加えることができないとした者が3人いたのは、“过”が本来の「過ぎる」という意味を失って、「つなぎ」の語としての性質を持っていることを意味しているのかもしれない。

4. 2. 3. “分”の省略について

「3時20分」と言う場合，“三点二十分”の“分”を省略した言い方も存在するが，ここでは何分の場合でも“分”を省略することができるのかどうかを調べるための調査を行なった。結果は下表の通りである。

8人のインフォーマントが同じ判断を下したものについては，次の2点にまとめることができる。

(i) 「5分」「10分」を表す場合には“分”を省略することができない。

		○	?	*
三点五	(3:05)	0	0	8
三点十	(3:10)	0	0	8
三点十一	(3:11)	3	0	5
三点十二	(3:12)	5	0	3
三点十三	(3:13)	5	0	3
三点十四	(3:14)	5	0	3
三点十五	(3:15)	7	1	0
三点二十	(3:20)	8	0	0
三点二十五	(3:25)	8	0	0
三点三十	(3:30)	4	0	4
三点三十五	(3:35)	8	0	0
三点四十	(3:40)	8	0	0
三点四十五	(3:45)	8	0	0
三点五十	(3:50)	8	0	0
三点五十五	(3:55)	8	0	0

(ii) 「20分」「25分」「35分」「40分」「45分」「50分」「55分」を表す場合には“分”を省略することができる⁸⁾。

(i) の“五分”“十分”の“分”を省略することができないことについては、“分”を省略すると“五”“十”という1音節になり安定性を欠くということと関係があるように思われる，“五”“十”の前に“零”を加えた、

〔32〕 三点零五

〔33〕 三点零十

で再度調査したところ、〔32〕については○が3人、?が3人、*が2人、〔33〕については○が1人、?が1人、*が6人という結果が得られた。“零五”“零十”のように2音節化すると安定性がやや増すようである⁸⁾。しかし、“零”のかわりに“过”を加えた、

〔34〕* 三点过五

〔35〕* 三点过十

はどちらも8人全員が成立しないとした。「5を過ぎる」「10を過ぎる」では時刻を言う表現として意味をなさないのであろう。

数字の部分が2音節、3音節の場合にはいつも“分”が省略できるかというとは必ずしもそうではないようである。調査の結果では“分”が省略可能なのは(ii)の場合だけであった。“三点十一”を成立するとした者3人、“三点十二”“三点十三”“三点十四”を成立するとした者5人というような人数の差については、詳しい原因はよくわからないが、これらについては“分”を省略しない方が自然なようである。

“三点十五”は7人が成立するとし、1人が不自然だとした。不自然だとした1人のインフォーマントは「“分”を省略するのならば“三点一刻”(3時15分)という別の表現を用いる」と指摘した。

“三点三十”については、4人が成立するとし、残る4人が成立しないとしたが、これも“三点半”という、“分”を省略するよりもずっと簡便な言い方が存在するためであろう。

4. 3. 「何時15分」「15分間」

「3時15分」を表す場合には“三点十五分”と言うほかに，“刻”という語を使って、

〔36〕 三点一刻

と言うこともできる。この“刻”はやや特殊である。

“刻”を『現代汉语词典』で見ると，“古代用漏壶记时，一昼夜共一百刻。今用钟表记时，以十五分钟为一刻，即一小时的四分之一”（古代，漏壺〔水時計の一種〕で時間を記録し，一昼夜が百刻であった。今日，時計で時間を記録し，15分間を一刻とする，すなわち1時間の4分の1のことである）とある⁹⁴。このことから“一刻”は「15分間」という「時量」を表すことがわかる。

しかし，〔36〕の“一刻”が「15分間」という意味だとすると〔36〕は「*3時15分間」というような，意味をなさない表現であることになる。ここでは本来「時量」を表す語が「時点」を表す語として使われているのである。これも「時点」と「時量」の関係の密接さを示す例と言える。

“一刻”の後に“钟”を加えて“一刻钟”とすると，これは間違いなく「時量」を表す。従って“*三点／一刻钟”は成立しない。

また，“*一个刻”とは言わないことから，“刻”が量詞としての機能を持っていることがわかる。しかし，時間を表す場合には“一刻”“三刻”（45分〔間〕）以外は使わない。

4. 4. 「何時何分前」

「3時5分前」（2：55）など「何時何分前」と言う場合には、

〔37〕 差五分三点

という表現を用いる。“差”は「へだたりがある」という意味であるから，〔37〕は「あと5分で3時」のような意味である。この“五分”は「時点」

ではなく「5分間」という「時量」のはずであるが，“分”の後に“钟”を加えた表現は成立するだろうか。また，この表現では“…点”の後に何も続かないから，最後に“钟”を加えることができるだろうか。これらのことを調べるために行なった調査の結果が下表である。

	○	?	*
差五分钟三点	8	0	0
差五分三点钟	3	4	1
差五分钟三点钟	0	3	5

“差五分钟三点”は8人全員が成立するとした。「あと5分間で3時」といった意味なのであろう。“差五分三点钟”は，文法的には“差五分／三点钟”にとらえれば成立すると考えられるが，一般に“差…分〔钟〕”の直後には“…点”という語が予想されるため“*差五分三点／钟”にとらえられ不自然さが増すのであろう。“差五分钟三点钟”は“*差五分钟三点／钟”にとらえられる上に，“钟”の重複による冗漫さによって，不成立もしくは不自然になるようである。

「何時何分前」を表す場合には“差…分…点”のほかにも，“…点差…分”を用いる中国人もいる。例えば，

〔38〕 三点差五分

ところが〔38〕を使って調査したところ，○が5人，?が1人，*が2人であった。この“…点差…分”は“…点过…分”（何時何分過ぎ）に対応するものとして生まれた表現のようであるが，誰もが容認しているわけではなさそうである。

5. おわりに

以上、数を含む「時間詞」について「時点」と「時量」の表し方及びそれに関するいくつかの問題について見てきた。現在日本で発行されている中国語テキストの時間の言い方に関する記述が様々であるため、どの言い方が正しいのかを調べてみるのが本稿の目的の1つであった。本稿の調査結果からもわかるように、時間の言い方には個人差がある。どのテキストの記述も絶対に間違いであるとは言えないようである。しかし、ほぼ誰にでも容認される時間の言い方については本稿の調査結果から明らかになったと思われる。

本稿では「時間詞」自体の文法的性質については全く触れなかった。「時間詞」には次のような注目すべき文法的性質がある。中国語で「私は日本人です」などと言う場合には動詞“是”を含んだ“A是B”(AはBだ)の形を用いて、

[39] 我是日本人。

と言うが、“B”が「時点」を表す「時間詞」の場合は一般に“是”を用いなくてよい。

[40] 今年一九九〇年。(今年は1990年です)

[41] 今天五月二十三日。(今日は5月23日です)

[42] 明天星期六。(明日は土曜日です)

[43] 现在三点二十分。(今、3時20分です)

“一九九〇年”“五月二十三日”“星期六”“三点二十分”などは名詞であると考えられがちだが、実はこれらは名詞としての文法的特性を備えていない。朱徳熙1982は名詞の文法的特性として次の2点を挙げている⁸⁾。

(i) 可以受数量词修饰。(数量詞の修飾を受けることができる)

(ii) 不受副词修饰。(副詞の修飾を受けない)

名詞“日本人”は“一个日本人”(1人の日本人)のように数量詞の修飾を受けることができるが、「時点」を表す「時間詞」では不可能である。

また、

〔44〕 今天已经二十三号了。(今日はもう23日だ)

〔45〕 剛三点。(3時になったばかりだ)

のように、「時点」を表す「時間詞」は副詞“已经”“刚”などの修飾を受けることができる。中国語文法において「時間詞」という品詞が設けられている所以はここにもある。

「時量」を表す「時間詞」についても上の (i) (ii) はあてはまらない。また、“是”を用いずに単独で述語になることができる。

〔46〕 快三年了。(もうすぐ3年間になる)

〔47〕 已经十天了。(もう10日間になった)

中国語で「年令」を表す場合には“岁”という量詞を使って、

〔48〕 一岁, 两岁, 三岁……

のように言う⁴⁴⁾が、これは一般に「数量詞」と考えられている。「年令」を表す語も名詞とは文法的性質を異にし、(i) (ii) があてはまらない。また、これも“是”を用いずに単独で述語になることができる。

〔49〕 我的孩子才五岁。(私の子供はやっと5才だ)

〔50〕 我已经五十岁了。(私はもう50才になった)

朱1982では、本稿で「時量」を表す「時間詞」と言ってきた語を「数量詞」としている。「時量」を表す「時間詞」は「数詞 + 量詞 [+ 名詞]」という構造であるから、文法的には朱1982の扱い方がより適当かもしれない。しかし、本稿では「時点」と「時量」の表現方法を主たるテーマとしたため、どちらも「時間を表す語」という意味で「時間詞」という語を使用した。これら文法的な問題については改めて検討してみたい。

注

(1) 32頁。同書では“时间词”と“时间词语”の2通りの語を用いているが、本稿ではより一般的な「時間詞」という語を用いる。

- (2) 同書では“时段”と言っているが、本稿では日本語としてわかりやすい「時量」という語を用いる。なお、後述の朱徳熙1982では“时量”という語を用いている。
- (3) 43頁。
- (4) ここで〔1〕の“一九八二年”は「数詞+名詞」、〔2〕の“一年”などは「数詞+量詞」ではないかという問題が発生する。確かに構造としてはそうなっているが、これらは1つの概念を表しているので、一般には「時間詞」とされる。しかし、最初に述べたように、朱徳熙1982では〔2〕を「数量詞」としている。
- (5) 〔2〕“一年”の“一”及び〔6〕“一天”の“一”は第4声で、〔4〕“一个月”の“一”は第2声で読まれる。“一”の変調規則については4. 1及び注(1)参照。
- (6) 一般には、「2番め」という順序を表す場合には“二”が使われ、「ふたつ」という量を表す場合には“兩”が使われる。ただし度量衡を表す場合の“二斤”“二尺”などや文語的な言い方“二位”（おふた方）など例外もある。
- (7) 本稿の調査すべてにわたって次の8氏に御協力いただいた。下関市立大学常勤嘱託講師馬鳳如氏、同聴講生盧明岐氏、荊南松氏、初国強氏、劉元東氏、邵徳平氏、劉建軍氏、同留学生李駱林氏。
- (8) 注(6)参照。
- (9) 99—100頁。
- (10) 王力1943, 331頁の注に“‘下午两点’, ‘点’是单位名词, 所以不能用‘二’”(“下午两点”の“点”は単位名詞であるので“二”を使うことはできない)とある。「単位名詞」とは今で言う量詞のことであろう。
- (11) もう1つ例外があり、“一九八二年”のように数字を1つずつ読む場合も“一”は変調しない。第2章で“一”は『時点』を表す場合には本来の声調第1声で読まれるが、『時量』を表す場合には後続音節の声調の違いに応じて第2声または第4声で読まれる」と述べたが、それはここに挙げたような理由によるものである。
- (12) 例えば(ア)としては『中国語教科書』(北京語言学院編, 光生館1960, 上巻189頁), 『総合中国語入門』(伊地智善繼ほか著, 東方書店1972, 86頁), 『L L中国語入門』(興水優著, 大修館書店1988, 79頁), 『90年代の初級中国語』(寺井泰明・劉樹仁著, 同学社1990, 27頁), (イ)としては『中国語まきり文句集』(安念一郎著, 金星堂1973, 205頁), 『高校中国語』(全国高等学校中国語教育研究会編, 白帝社1987, 24頁), 『文法からの中国語入門』(香坂順一著, 光生館1989, 45頁)。
- (13) ここで“三点一分”を用いたのは, “一分”だけでは「時点」を表すのか「時量」を表すのか不明確であるが, “三点一分”ならば「時点」であることがはっきりとするからである。後の〔16〕〔17〕も「〔3時〕2分」という「時点」を表す場合に“二”“兩”のどちらを使うかを調べるための例文である。
- (14) 125頁。

- (15) 例えば『初めての中国語』（原田松三郎著，金星堂1987，71頁），『90年代の初級中国語（前出，27頁）。しかし，佟慧君1986，27頁には“前面有点钟时，‘钟’一般不用，只用‘分’”（〔何分の〕前に何時〔という語〕がある場合には一般に“钟”を用いず，“分”だけ用いる）とある。
- (16) もちろん“钟头”のかわりに“小时”を用いてもよい。
- (17) 64頁。
- (18) 4. 1で挙げた〔21〕“费了三点钟的工夫”では○が0，?が3人，*が5人で〔30〕の結果と若干異なった。〔21〕で“的工夫”が加えられていることが影響しているかもしれない。
- (19) 4. 1で「2分間」は“两分钟”のほかに，“二分钟”とも言えるという調査結果を挙げたが，これも「時点」と「時量」の関係の密接さを示す1例である。
- (20) 330頁。
- (21) 330頁。ただし同書に挙げられている例は“五点零十分”である。
- (22) 『LL中国語基礎Ⅰ』（興水優著，大修館書店1988，97頁）には「10分・20分・30分・40分・50分の場合，“分”が略せる」という，本稿の調査結果とは異なる記述がある。
- (23) 『学汉语』（王彦承・菱沼透著，白帝社1988，39頁）には“下午两点零五”（午後2時5分）という例が挙げられている。また，“零十”を成立するとするインフォーマントの数が“零五”に比べて少ないのは，4. 2. 2で見た“零十分”の適格性と関係があろう。
- (24) 641頁。
- (25) 41頁。
- (26) 4. 2. 3で「何時何分」の言い方における“分”の省略について見たが，「年令」を言う場合には“十一岁”以上で“岁”を省略することができる。例えば“我的孩子今年十一〔岁〕”（私の子供は今年11〔才〕だ），“我已经三十〔岁〕了”（私はもう30〔才〕だ）など。日本語でも「11才」以上で「才」を省略することができる。「10才」以下では「才」を省略できないが，別の「ひとつ」「ふたつ」……「とお」という言い方がある。これは明らかに「年令」を量としてとらえた言い方である。「11才」以上で「才」を省略できるのは「11」「12」……を，「ひとつ」「ふたつ」……「とお」の延長上の言い方としてとらえることができるからかもしれない。

参考文献

- 刘月华・潘文娛・故辵1983『实用现代汉语语法』，外语教学与研究出版社。
朱德熙1982『语法讲义』，商务印书馆。

上野恵司1988『中国語漫筆』, 白帝社。

王力1943『中国現代语法』, 王力文集第二卷, 山东教育出版社1985による。

倉石武四郎1963『岩波中国語辞典』, 岩波書店。

佟慧君1986『外国人学汉语病句分析』, 北京语言学院出版社。

『中日大辞典』増訂版, 愛知大学中日大辞典編纂処編, 大修館書店1986。

『現代汉语八百詞』, 吕叔湘主編, 商务印书馆1980。

『現代汉语词典』, 商务印书馆1978。